浜・私・幼

横浜市幼稚園協会　協会報　No269

公益社団法人　横浜市幼稚園協会　発行
〒221-0055
横浜市神奈川区大野町 1-25
横浜ポートサイドプレイス　アネックス 5F
電　話　045（534）8708
http://www.kids-yokohama.or.jp
編　集　横浜市幼稚園協会広報部
発行者　木元　茂
印刷所　株式会社横濱大氣堂

◆ 第 54 回横浜市幼稚園教育研究大会
◆ 第 56 回神奈川県私立幼稚園教育研究横浜地区大会
「今だから考えよう！ 幼稚園の教育の本質を！」

平成29年1月21日（土）　神奈川県民ホール他

平成 29 年 1 月 21 日（土）、神奈川県民ホールで、第 54 回横浜市幼稚園教育研究大会が開催された。

県民ホールで行われた午前の開会式・全体会には、横浜市内の幼稚園教職員を始めとした多くの参加者が集まり盛大な大会となった。

開会式には、横浜市副市長の柏崎誠様、神奈川県県民局次世代育成部私学振興課長の秋山昌弘様はじめ多くのご来賓の方々もお出でくださった。

大会運営委員長の神奈川県私立幼稚園連合会の小澤俊通会長より「少子化という言葉に流されないで、教育は人が人を育てるという理念をしっかり持って日々の研鑽を深めていきましょう」との挨拶があった。

続いて、大会実行委員長の横浜市幼稚園協会の木元茂会長は、「各園が保育の質の向上を目指し、その中身を発信し、保護者に幼稚園を理解してもらうことが大切です。平成 30 年の幼稚園教育要領の改訂では、大きなテーマになっているのが乳幼児期に育てるべき“非認知”という力です。目標や意欲・興味を持ち、ねばり強く仲間と協調して取り組む力や挑戦する力を十分に育てられるかどうかは保育の質に左右されるという結果も出ています。そこで今回の大会テーマも、乳幼児期の“非認知能力”を十分に育てるためどう取り組んでいったらいいのか、にしました。本日の教育研究大会でしっかり学んで明日からの保育に役立ててください」と述べた。

引き続き行われた全体会では、幼稚園、保育園の２名の先生から実践報告があった。午後からは９分科会場に分かれ、協会の研究委員会と各支部が１年間を通して研究してきた内容の発表が行われた。

▼木元茂会長の挨拶

横浜市幼稚園教育研究大会　全体会

全体会のテーマに基づいて、第１部は幼稚園、保育園からそれぞれの実践報告があり、

テーマ・乳幼児期に育てるべき非認知の力とは

実践提案／　かえで幼稚園（広島県）前教諭　　伊東　芙美　先生
港区立伊皿子坂保育園　保育士　　村田　晴恵　先生

第１部

１．かえで幼稚園

～長縄跳びの記録更新から～

提案者の伊東先生が、担任していた時の長縄跳びの事例をＤＶＤ「遊んでぼくらは人間になる」を視聴し、発表した。

かえで幼稚園の長縄跳びで年長のゆりちゃんは、1702 回も跳び新記録を作った。にこにこと喜んでいたのもつかの間で、あやなちゃんがすぐに何と 1952 回も跳んで記録更新をしてしまった。ゆりちゃんは、あやなちゃんが自分の記録を抜いた時にびっくりし呆然とした様子で、一人で保育室に帰って行ってしまった。友だちが追ってきて、「あやなちゃん、頑張ってんよ。けどいやなん？あや抜かしたえ？ゆりちゃんが頑張らんとゆりちゃんの記録にはならん。自分が跳びたいと思ったら、頑張ればいいんよ。それが大事だと思う」と励ましてくれた。教室に戻った子どもたちは、ゆりちゃんが泣いていることに気づいた。担任の先生が、「ゆりちゃんの涙は悔し涙だよ。すごくいい涙なのよ。どうしてかって言うと、ゆりちゃんがいたからあやなちゃんは頑張れたんでしょ。一人の力じゃあないんよ、本当はみんなの力。涙が出るほど悔しい気持は、頑張る力になるけんね。ゆりちゃん、いいことよ。涙見せずに、次、頑張って」とクラス皆に話した。

その後、ゆりちゃんはあやなちゃんを誘って、二人で一緒に長縄跳びに挑戦している姿があった。、

かえで幼稚園は園長・保育者・子どもが皆、受容と信頼を大切にしている。先生たちのチームワークの良さがあり、その中で子ども一人ひとりが自分を出している。この長縄跳びも、大事なのは、皆が自分の記録を伸ばすことに夢中になって取り組むこと。このDVD の 2 人もお互いの存在がいい刺激になったのだと思う。保育者にとって重要なのは立ち位置。ゆりちゃんが保育室に駆け込んだ時は、隠れるように見守り、皆に話しかけた時は子ども達の先頭に立った。子どもが夢中になれるためには先生が見ていてくれる安心感が必要で、それが子どもの心の育ちを押し上げてくれるのではないかと思う。

２．伊皿子坂保育園

～０歳児への絵本の取り組み～

保育士の村田晴恵先生から、「0 歳クラスに絵本を取り入れる実践」について発表があった。

当時受け持っていた０歳児を豊かに育てるために、絵本を取り入れてみようと研究を始めた。子どもたちの好きなものは何かなと探ってみると、「いろんな表情の絵本、くりかえしのあるもの、フレーズや歌、見たことのある動物、リアルな写真」などが出てきた。

そこで、「いないいないおかお」（写真の顔の表情）、「あーんあん」（泣き顔と声）「だるまさんシリーズ」（繰り返しのフレーズ）などを選んでみた。さらに、子どもたち一人ひとりが出てくる子ども版「いないいないばあ」の絵本を手作りしてみると、0 歳児が夢中になってその手作り絵本を見るようになった。「もう 1 回」見たい時には、指を一本立てることで、先生に「もう１回」の気持を伝える姿も出てきた。

１歳児の担任になり、「まるまる」～○探しの始まり～、「おおきいちいさい」（声のトーンを変えて読む）の絵本を読んでみた。また、保護者から最近図鑑を見ているということを聞き、1 歳児でも図鑑を見ていいのだと気づき、「ぞうはおおきい」という写真絵本をとりあげた。子どもたちはゾウに詳しくなり、ゾウさんブームが起き、「ぞうくんのさんぽ」やぞうくんのぬり絵などに発展していった。

▲全体会で実践提案／左から、村田晴恵先生と伊東芙美先生

第 2 部は大豆生田先生が、２つの実践例から「非認知能力」について講演をされた。

～乳児期から幼児期の保育実践を通して考える～

講　　師／　玉川大学大学院教育学研究科教授　　大豆生田　啓友　先生

ある日、ズボンをはかないでオムツだけで登園してきた子がいた。「ズボンをはきたくない日もあるよね、はきたくなったらはけばいいよ」と言って「しろくまのパンツ」を読んだ。しろくまくんがパンツをはいていないので、探してあげようと探していたら、実は白いパンツをはいていたというオチのある本である。
この絵本から「おにのパンツ」の絵本へと繋がっていった。

１年を通じてたくさんの絵本を読んできた。子どもたちが先生の周りに集まって、絵本を読んでもらっている姿から、小さい子どもでも夢中になって楽しめるものがあるということがわかってくる。保護者の方には、保育者が両親よりも先に見せてもらう子どもの成長、かわいらしさを伝えていきたいと思っている。

▲DVDを使った発表の様子

▲講　師　大豆生田　啓友先生

第２部　大豆生田先生から

事例「3 歳児　あっ君の剣作り」

３歳児クラスの子どもたちは、空き箱等を使って剣を作ってヒーローごっこで遊んでいた。あっ君は積極的には参加しない子だが、まわりのことをよく見ている子どもである。この日も皆に背を向けてしゃがんでいたが、何やら自分を鼓舞するようにつぶやき、剣作りにチャレンジし始めた。なかなかうまくいかず、25 分もかかったが、ようやくできたその剣を持って仲間の所へ行った。ところが友だちから「かっこわるい」と言われてしまい、剣を背中に隠し、そっとゴミ箱に捨ててしまった。しばらくしゃがみこんでいたが、もう一度作ってみようと廊下へ箱を探しに行った。結局は、集まる時間がきてその日は作れない切ないあっくんがいた。そのことを保育後に知った先生だったが、翌日あっ君がヒーローごっこの仲間に入れたことを確認した。

親から見て、ただ遊んでいるだけに見える中に、実はすごく子どもの学びがある。それが非認知能力である。意欲・自尊心（自己肯定感）・粘り強さ・コミュニケーション（他者とのつながり）は、夢中になって遊び込むことで生まれる。

遊びのなかの学びを育てる為には、先生が子どもを理解するプロでなければならない。先生たちが、今、この子は何に興味・関心があるのか、何をおもしろいと思っているのかを知り、環境を用意してあげることが重要で、ここが家で遊ばせているのと違うところである。

子どもたちの遊びの中で、試行錯誤や探求心がおきてきて、非認知の力が育つのである。子どもたちの、遊びが学びに向かう力につながるためには、次の３つのことが重要である。

① 子供の発声や発話への対応（応答性）
② 否定的な態度をとらない。
③ 読む力を伸ばす。

周りの大人の丁寧な関わりが、非認知力を伸ばすのである。子どもたちは遊びの中から学ぶという、こんな大事なことをしていることを一般の人にも知ってもらいたい。

第1分科会

特別研究委員会「1」　テーマ

子どもが夢中になって遊ぶ保育を目指して

～子どもの世界の探究～

講師　お茶の水女子大学こども園園長　**宮里　暁美先生**

会場　横浜ワールドポーターズ 6 F イベントホール B

特研「1」では、夢中で遊ぶ子どもにはどんな心の動きがあり、保育者にどのような援助が求められるのかをグループに分かれて話し合いを重ね研究してきた。子どもの姿をとらえ語り合うことを通して、夢中で遊ぶ中で子どもは、心を満たされ、発見し、時には探索し、挑戦するなど大人の想像を超えたさまざまな心の体験をしていることが分かった。また、保育者が迷いながらも子どもと向き合って保育を紡ぎ、子どもの行為への「問い」を保育者同士が語り合ってイメージし読み解いていく大切さを改めて確認できた。当日は、研究の成果を発表し、参加者それぞれが持ち寄った写真などを手掛かりに語り合い、子どもが夢中になる世界について理解を深めた。

（横浜隼人幼稚園園長　水越美果）

第2分科会

特別研究委員会「2」　テーマ

子どもと保育者がイキイキする関係を考える

～子どもと「私」ってどんな関係？見方が変われば、考え方が変わる～

講師　関東学院大学教育学部こども発達学科准教授　**三谷　大紀先生**

会場　ヨコハマジャスト 1 号館 8 F 会議室

保育者が子どもの姿を見て、「何に向かい、育っていこうとしているのか」を考え、子どもと一緒に遊びや生活を創りながら探求する姿勢が保育者の資質として重要である。このことから特研「2」では自分自身の保育を開き他の保育者との対話を通して標記テーマの様々な事例を考察してきた。子どもとの関わり方を模索した事例発表があった。これを受け、参加者もグループに分かれて普段の保育を振り返り話し合いを行った。保育観、子ども観を問い直し、子どもの姿を多様な視点からとらえ直す機会となった。こうしたたゆまぬ努力が、子どものより良い成長や環境に欠かせないと感じた。

（舞岡幼稚園園長　相澤謙太郎）

第3分科会

特別研究委員会「3」　テーマ

どの子にもうれしい保育の探究

～障がいのある子どもや関わりの難しい子どものいる保育実践を考える～

講師　國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授　**野本　茂夫先生**

会場　神奈川県民ホール 6 F 大会議室

障がい児や外国籍児などにおける保育の悩みや課題も含めながら、「どの子にもうれしい保育」とはどういうものかを講師を交え、年間を通して話し合い取り組んできた。障がいの有無などに限らず、子ども一人ひとりの気持ちを読み取り、その子に合わせて関わることは同じである。子ども一人ひとりから全体の保育の枠をどう作っていくか探求してきた内容を基に、インクルージブ保育について、４人の先生方の事例発表が行われた。参加者も実際にグループで語り合いながら考え学ぶ機会になった。「どの子にもうれしい保育」を考えていく中で、共通して見えてきたことは関わりの難しい子においても「人が好きになる」ということ、特に保育者と子どもの信頼関係の大切さを改めて感じた。

（こすもす幼稚園園長　椿木元生）

第4分科会

西支部

テーマ

ガキ大将になろう！ 保育の中のプレイリーダーとは？

～そこで芽生える、知性、社会性、身体能力～

講師　山梨大学教育学部長　大学院教育学研究科長　**中村　和彦先生**
一般社団法人 KISS インターナショナルインスティテューツ代表理事　**半谷　真一先生**

会場　横浜市教育会館 ４Ｆホール

運動を伴う遊びは、①身体運動の発達（運動能力、技能）②認知的な発達（思考、判断）③情緒や社会性の発達（コミュニケーション能力、態度）を促すという３つの視点から、遊びや活動を行い、保育者の働きかけや子どもたちの育ちを各年齢で追っていった事例が発表された。年齢ごとに半谷先生から講評があり、続いてじゃんけん遊びや手遊びを会場全体で行ったり、ボールや新聞紙を使っての遊びも紹介された。中村先生からは、子ども達が抱えている問題やその背景、子育て・教育において大切にしなければいけない発達の特性などのお話があった。

プレイリーダーとはプレイ（遊び）をリードする（届ける）こと。２年後の教育要領改訂の際、プレイリーダーという言葉が具体的に示されるであろうとのこと。今後も更に学び合っていかなければならないと感じた。

（藤棚幼稚園職員　菅沼　正平）

第5分科会

港南支部

テーマ

子どもの一年間の育ちの物語を考える

～エピソードから見る子どもの心の動き～

講師　福島大学人間発達文化学類教授　**大宮　勇雄先生**

会場　鶴見大学会館 メインホール

第５分科会では、幼稚園に初めて出会う３歳児の育ちの物語が発表された。環境の変化に戸惑いを感じている一人の子どもの姿から、保育者がどのような関わりを持ち、その子の心のつぶやきや思いを受け取ることで仲間との関係性を紡ぐ姿や、子ども自らが育ち歩んでいく姿を一年間見つめてみた。３園の発表者が共通して持ち合わせて居たものは、心の共感（響感）をもとに保育が展開されていることであり、そんな環境が子ども同士の共感（響感）を生み出し、仲間との信頼関係や励ましがその子の育ちの物語の重要な部分を形作っている姿が発表された。

（金井幼稚園園長　木都老　克彦）

第6分科会

磯子支部

テーマ

ためしてみよう！子どもと絵画のつながり

～子どもが思い入れのある絵を描くとき～

講師　芸術による教育の会　美術教室事業部専任講師／研究センター　センター長　**武田　一城先生**
企画制作センター　センター長　**池田　真紀先生**

会場　神奈川産業振興センター 14F 多目的ホール

第６分科会では指導者として子どもに絵を描かせる時に何を大切にすればいいのかについて考えた。まず磯子区内の幼稚園の絵画に関するアンケート集計報告や研究の経緯の発表があった。次に、実際に子どもに指導するように「顔」を描いた上でグループディスカッションをし、各園での環境・指導の違いを話し合った。また幼稚園によってやり方は様々だが「子どもに自由に楽しんで描いてほしい」という願いは一つであるという結論に至った経緯や、子どもがわくわくするような絵画活動を目指して研究した事例の発表が行われた。

最後の助言講師の話から、毎年同じ課題を当たり前のように行うのではなく、時には子どもにあった課題かを検討したり、新しい取り組みに挑戦することも大切だということを学んだ。

（汐見台西幼稚園教諭　秋元瑛美子）

第7分科会

緑支部

テーマ

自然を見てみよう・ビオトープを作ってみよう

～子どもの豊かな感性を育むために、幼稚園教諭に必要な自然とのつきあい方～

講師　公益財団法人日本生態系協会　教育センター長　**田邊　龍太先生**
１級こども環境管理士／ながつた幼稚園園長　**笠原　逸子先生**

会場　横浜ワールドポーターズ６Ｆ
イベントホールＡ

子どもの自然を受けとめる感性を保育者自身がどう共有していくか、まずは自らの感性を再発見し、自然に対する多くの働きかけができる保育者でありたいということで、最初に３園の実践例の報告を受けた。実地体験に基づいた保育者の自然観の変容、ビオトープ作りを通して自園の原っぱに生息する植物や昆虫発見、水辺の生きものを呼ぶための立地条件の気づき、それぞれの幼稚園での実践例は、多くの学びと今後への課題を残して終えることができた。

また、講師の先生による専門的な知識と自然への熱い思いを伺い、子どもの感性に寄り添うことの必要性、保育者としての指導観を、改めてみつめ直すことができた。

（緑幼稚園園長　後藤かをり）

第8分科会

都筑支部

テーマ

リズムの魔法で笑顔いっぱいの保育を！

講師　リズム音楽研究所主宰　**加村　雅玄（カムジー）先生**

会場　ワークピア横浜２Ｆ
くじゃく・おしどり

講師のカムジー先生の助言を頂きながらリズム遊びを通して、人的環境である保育者自身が少し位のことで心を閉じない力、人前で自分の意見、考えをしっかり話せる力を養うことからスタートした。

タンバリンやカスタネットなどを使ったリズム表現を通して、人間に本来備わっている体の奥底にあるエネルギーを呼び起こし、表現する楽しさ、集中する楽しさ、想像する楽しさ、コミュニケーションの楽しさ、思い切り声をだして、おなかの底から笑って生きていることの素晴らしさを体全体で参加者が体感できた。楽しく学べるリズム研究発表を進めながら、あわせてどの園でもできる音楽指導方法の事例発表も行った。

（愛和のぞみ幼稚園園長　小泉　紀子）

第9分科会

戸塚支部

テーマ

保育者の思い通りにならない子どもの表現

―だから保育っておもしろい―

講師　アートコミュニケーター　**村田　修治先生**

会場　神奈川県民ホール　小ホール

戸塚支部では、『表現』という大きな括りの中から、「導入」「制作」「音楽」「遊び」「行事」「言語・コミュニケーション」のグループに分かれて、子どもたちの豊かな表現がどのような保育者と子どもの関わりから生み出されるのか探求してきた。

当日は、各グループから絵画表現や制作表現、身体表現、歌唱表現の様子の写真や動画を見たり、また子どもたちが描いた実際の作品を紹介したりするなどの事例発表を行った。また、発表者たちによるロールプレイ形式で、実際の保育の様子を再現し、参加者がより実際の保育現場を想像しやすい発表を行った。

講師の村田修治先生には、様々なご経験や立場から「思い通りにならない子どもの表現」について、講演していただき、参加者の皆さんと保育のおもしろさを改めて共感した。

（東台幼稚園園長　佐藤力弥）

給食は食育の教材

横浜市立上菅田小学校　栄養教諭　西村　美智子

「私は、横浜市立上菅田小学校の栄養教諭の西村です」と初めてお会いする方に挨拶をしますとほとんどの方が「栄養教諭さんってどんなお仕事をされるのですか」と質問されます。それも当たり前のことなのかもしれません。

平成 17 年に「食育基本法」が施行され、国民全体で食育に取り組むことを定めたこの法律は、世界に類をみません。食育基本法では、特に、幼少期より学校教育の中で計画的に食育を進めていくことが謳われています。食について学校教育の中で学ぶことを意図的・計画的に進めていくコーディネーターとしての役割を担って栄養教諭が誕生しました。

本来の栄養士としての仕事の学校給食管理と、食に関する指導をする教諭の仕事の二つを併せ持つのです。まだ、十年にも満たない新しい職種なのです。とはいっても、学校の時間割の中に「食育の時間」があるわけでも教科書があるわけでもありません。では、どの時間でどのようにして食育を学ぶのでしょうか。実は 50 年も前から日本の学校教育の中には「食べて学ぶ」給食の時間があったのです。横浜市の給食は食育の教材となるように献立を作成し、担任教諭が給食時間に指導できる資料や子どもたちも学べる「ぱくぱくだより」を合わせて考えています。心身ともに健康な横浜の子どもたちを育てる食育の教材となる給食献立立案の指針は下記の内容が骨子となっています。

- 日本型の食生活を推進し、脂質の摂取量を抑え、食物繊維が確保できるよう、米飯の回数を増やし、魚・野菜・きのこ・豆類・海藻などを多く使用する。
- 日本の食文化・伝統食・横浜らしさ等を取り入れる。
- 季節感が感じられるよう、旬の食品の使用に配慮する。
- 食と健康が関連付けられるようにする。
- 市内産の野菜・地場産品の活用をする。

横浜市の給食は和食が多く、魚・丸大豆・ひじき・切り干し大根などいろいろな食材を使用しており、子どもたちの大好きなファミレスやファーストフードの食事からは、かけ離れた内容になっています。そのため、春はいわしの煮魚や大豆の磯煮を前に呆然とする新一年生の姿が多く見られます。ところが秋を過ぎる頃になると「さばの味噌煮がすごくおいしかったよ」「ひじきサラダ大好き！　また、出してね」という声が 1 年生の教室を回ると聞かれるようになります。「いろいろな食べ物やお料理が食べられるようになってえらいね」とたくさん褒めてあげます。まさに「食べて学ぶ」教材としての給食です。

幼保小交流をしている園長先生から小学校に入学してまず躓くのが給食であることが多いので就学前の年長さんと保護者に給食のことを話してほしいとのお声がかかり園へ伺っています。

子どもたちには、赤ちゃんから小学生までの骨のレントゲン写真を見せてたくさんのカルシウムが必要なことを「カルちゃん」の教材で示します。カルシウムがたくさん入っている牛乳が毎日給食に出るから大きくなれることを話して牛乳が飲めるようになりたいと意欲を持たせます。入学当初は、牛乳が飲めずに給食の時間が辛くなる子が多いのです。

保護者の方には、食育の教材となる給食の意義を例示しながらお話ししたり、和食が多いのでお箸が正しく使えるように就学前に練習したり、ごはんを装うお手伝いをしたりすることをお願いしています。少しでも楽しい給食時間を過ごせるようにと願っています。

▲レントゲン写真を見せて子どもたちに説明

子育て教育相談室より

子育ての応援メッセージ

横浜市幼稚園協会　子育て教育相談室相談員　飯塚　史

そろそろ進級や卒園が近づいてきました。少し早いですが 1 年間を振り返ってみてはいかがでしょうか。まだまだ心配、こんなことで進級、あるいは入学できるのだろうか !? とやきもきされることがあるかもしれません。しかし 1 年前の我が子の姿を振り返って比べてみるといかがでしょうか。あるいは 2 年前、3 年前、生まれたとき･･･。きっと成長したことが感じられるでしょう。どの子も成長したいと願っているし、ご両親や先生には褒められたい、怒られたくないと思っています。「じゃあ何で同じ失敗を繰り返すの！？」「何度同じことを言わせるの！？」と感じられるとき、少し振り返って考えてみて欲しいことがあります。

①子どもにとって難しすぎる要求ではないか？
②こちらの伝えたいことが正しく伝わっているのか？
③伝わっていてもできない理由は何か？

例えば朝の支度。時間ギリギリなのに子どもはのんびり、あるいはぼーっとしている。自分はイライラ。それを上の 3 つの観点から考えてみると、

①子どもたちにとって、時間はジュースやお菓子などのように減っていくのが目で見てわかるわけではありません。時間の概念のないこの年代の子どもたちには「あと 5 分」を理解するのが難しかったりします。その場合は良く知っている歌の CD などを流して「この歌が終わるまでにお支度しよう！」と促したり、砂時計で時間が目に見えるようにするのも一つです。
②「遅いよ」では具体的に何をしたら良いかわからない子も少なくありません。「遅いから、新幹線みたいに超特急で着替えよう」と具体的にどうすべきかを伝えてあげることで動けるようになる子もいます。
③わかっているはずなのにわざとしない、そんな時はもしかしたら甘えたいのかもしれません。他の時はできるのに登園前に限ってやりたがらない場合は是非手伝ってあげてください。「そんなことしたら自分でやらなくなるのでは？」「園や小学校に入ってから困るのでは？」と心配されるかもしれませんが、それは大丈夫です。心のエネルギーが不足してできなくなっているときは、周囲が手伝ってあげることで心の充電ができ、楽しく 1 日を過ごせるようになるでしょう。

日ごろよくありそうなシーンを例にお伝えしましたが、「こんな場合はどうなのだろう？」と疑問に思ったときは、どうぞ「子育て教育相談室」にお電話ください。お子さんの思いを想像しながら、一緒に解決策を考えましょう！

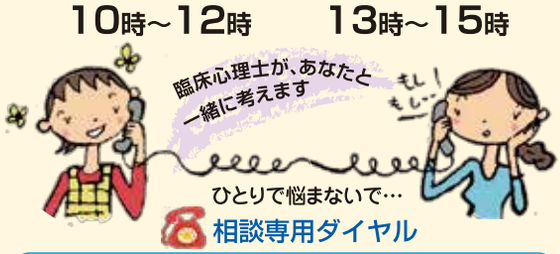
子育て教育相談室

【相 談 日】

毎週**火**曜日・**金**曜日（年末年始、祝祭日を除く）

【受付時間】

10時～12時　　**13時～15時**



相談専用ダイヤル

045-534-8837

公益社団法人　横浜市幼稚園協会
http://www.kids-yokohama.or.jp
TEL 045-534-8708

編集後記

平成 28 年年度もあとわずかとなりました。盛りだくさんの情報と協会の「方向性を探り推し進める力」をわかりやすくお伝えできるよう、皆様にお力をいただきながらここまで進んでくることができました。ありがとうございます。

子ども・子育て新制度が始まって各園の移行や対応など幼稚園がまさに日々動いていることを感じています。来年度には、新幼稚園教育要領の全面実施も控えています。これからもよりよく、たくさんの方々に読んでいただける協会報を目指して取り組んでいきたいと存じます。ひきつづきのご愛読をよろしくお願いいたします。

広報部長　浅沼郁子